

交通事故後遺症（頸椎捻挫）

女性 55歳 主婦

主訴 左頸部から指先にかけての疼痛、シビレ

現病歴 半年前に交通事故（後方から40km位の速度でほぼノーブレーキの状態での追突）に遭い、それから頸～肩～腰が痛み出す（特に左側）。整形外科でX線をうけ、頸椎変形（狭窄）が認められた。他県で3ヶ月間入院して治療を受け、他の治療院でも加療していたが、思うように治らず、人から聞いて来院する。

所見 緊、数。左中注（++）、右天枢（+）、火穴（++）、頭部瘀血、左胸鎖乳突筋やや硬化。

治療 扁桃処置、自律神経調整処置、肺実、瘀血、頭部瘀血、左帯脈、左陽輔・外関の処置を施す。灸は左中封、左尺沢、復溜、手三里、左陽輔、左外関。（なぜこのような処置をとったかは後で詳しく述べます。）

経過 二回目（3日目） 眠りは良くなる。普段、頸肩～背中～腰がこわばり、手にかけて痛み、シビレあり。同前処置。

三回目（6日目） 左肩甲部～前腕にかけてシビレ大分良くなってきた。眠りもずっと良い。緊、大分柔らかく。

四回目（10日目） 左肩～上肢のシビレずっとよい。右天枢（+）、左中注（-）、左胸鎖乳突筋（+）、火穴（やや+）。扁桃、自律神経、帯脈、瘀血、左陽輔・外関。

六回目（17日目） 左肩～上肢ずいぶん良い。頭痛軽い。緊数緩む。同前処置。

九回目（26日目） 左肩～上肢にかけて動かした後ピリピリする。足がほてる。緊数は殆んど無し。火穴（やや+）、右天枢（+）、左中注、大巨共に（+）、天牖（+）。この後、徐々に良くなってゆくが、事故の衝撃が強かったため、薄紙を剥くような治り方だ。

二二回目（71日目） 足のほてり、足底に物がくっついている異物感あり。

二八回目（94日目） 足底の異物感なくなってきた。腰、肩も大分良くなる。九割方良くなっている（自他共に）。扁桃、自律神経、帯脈、瘀血処置。

三四回目（115日目） 足のほてり感あるが、異物感は消失。

三七回目（126日目） 足のほてりがあるが、左手のこわばりずっと良い。頭痛消失。洪、やや数、緊、火穴（+）、天牖（+）。扁桃、自律神経、帯脈、瘀血、陽輔・外関。

五一回目（176日目） 御主人の御母堂が入院して、遠方（クルマで2時間の距離）まで通いだす。この頃より、精神的ストレスのため、頸肩痛が再発したり、胃に障ったり。この後も何度となく来院されるが、看病疲れで、沈、緊が呈していた。そして、いよいよ看病等で忙しくなり、月一回位になる。本来の事故後遺症の症状はほぼ治癒したと考えられる。

考察 交通事故は外傷あるいは損傷の範囲に入り、正確には頸椎捻挫ないしはむち打ち損傷になります。頸椎捻挫には幾つか種類がありますが、彼女はその中の神経根型頸椎捻挫でしょう。この神経根型とは「頸の痛みや上肢の知覚異常を主な症状とするタイプで、症状は椎間孔から出て上肢に伸びている神経が上下の頸椎に挟まれるためにおこるもので、頸を曲げたり、回したり、咳やくしゃみをした時に強く感じるのが特徴」というものです。

普通むち打ち損傷といった場合、これより軽い捻挫型（頸や肩が痛み、動かしにくい

などの寝ちがいや肩凝りに似た症状)が多いのですが、この患者のように神経根型にも十分鍼灸治療が効を奏します。

では、何をポイントにおいてほぼ治癒まで辿りついたか具体的に見ていきましょう。

当患者は、事故の衝撃がひどく、助手席に乗っていたため全く無防備、不意をつかれた感じで、三ヵ月ばかり入院を余儀なくされた。大分に帰ってきて、最初に診たとき、ほとんどの反応がでていた。

まず問診では、現症を正確に具体的に尋ねた。原因もわかり、整形外科での検査結果や現在服用している薬、他院での治療状況を聞く。これによって病気の概略がわかってくる。

それから脉状。最初の所見では、緊、数。これは疼痛を現わし、それと自律神経失調症も示している。腹診では左中注の圧痛。これは瘀血を意味しており、右天枢は慢性扁桃腺炎を現している。火穴すべて(++)ということは少し圧を加えただけで痛がる。これは自律神経失調の交感神経過緊張を著明に現している。左胸鎖乳突筋がやや硬化。それから、頭部瘀血、つまり頭皮のプヨプヨ感があるということは、事故後、入院中も含めて、かなり神経を使って心労で疲れきっているというのがわかる。

長野式診断で病気の実態がだんだんみえてくる。つまりこれらの情報を基にして、そしてこれらの反応が、この患者の治癒を妨げていたわけです。

次にどう治療していったか。長野式治療は、それぞれに対応する処置をもっています。前述した反応に従って処置をします。

基本処置であり、腹証からも扁桃腺処置、瘀血処置、肺実処置。脉状と火穴から自律神経調整処置。頭部から頭部瘀血処置。頸部の筋肉の状態や症状から左帯脈。左上肢のシビレから左陽輔・外関。

最初の治療で眠りが良くなり(体がいい方に向いた)、二回目から左頸～上肢の痛み、シビレが楽になってきた。つまり治癒を阻害している要因をとっていったわけです。

あとはだいたい同じ処置ですが、その都度、その時の反応や状況を考慮しながら処置を考えていき、その結果が治癒に繋がったと思っています。

その中で特に大事な指針があります。

“脉状”です。最初「緊数」だったのが、二週間余りで、「緊数ゆるむ」になり、やがて「緊数ほとんどなし」になり、4ヶ月くらい経って「洪」がでてくる。

「洪」というのは、

“極めて太く指下にあり”(脉経)

“来る事いたって大にふとく、踊って指に満ちて力あるなり”(脉法手引草)

つまり指に太く触れる脉状で、また熱を意味しているから、全身の血流が良くなってきているわけです。この洪脉の出現まで四ヵ月かかりました。このとき症状は九割方好転していたのです。

素問、脉要精微論篇に次のように記されています。「人体内外の生命活動の微妙なところは脉状に現れます。」と。脉状がいかに重要な治療指針になるかがお分かりいただけると思います。